

〔新刊紹介〕

浜松中納言物語の会校注

『浜松中納言物語 巻一 注釈』

川崎 佐知子

「物語を作るとならば、かくこそ思ひよるべけれ」と『無名草子』に称賛された『浜松中納言物語』は、物語の舞台を日本と唐土とに設定する新機軸を打ち出した伝奇性の色濃い作品である。ここで紹介する本書は、この平安後期王朝物語文学の代表作品の注釈書である。

底本には、『笠間影印叢刊』として公刊される国立国会図書館蔵榊原吉野旧蔵本が用いられている。注釈の対象は、夢で亡父の転生を知った主人公の源中納言が、渡唐して河陽県の唐后と恋に落ちるまでが描かれた物語巻一である。本文が現存する巻五までを覆うのではないが、かえって細部にまで十分に行き届いた配慮が感じられるように仕上がっている。

本書は、巻一の本文を、四十二に区分し、それぞれの的確な〔区分題〕を付して

いる。底本との対応を明確にするため、五種の先行注釈書の頁数・行数を並記する工夫がなされている。〔本文〕は、徹底してよみやすさにこだわった校訂本文でありながら、〔校異〕欄に校訂以前の底本表記を注し、原本を尊重する姿勢も忘れない。

〔注釈〕は、本文から抽出した語句の平明な語釈である。物語だけではなく、和歌・歌謡・歌学書・説話・日記・史書・古記録・故実書・経典・古辞書・漢詩文など広範囲に目配りがなされている。とりわけ〔参考〕には、関連の深い諸資料・先行研究の掲出・紹介とともに、独自の新知見も提示されていて、これは特筆すべき点かと思われる。巻末に配された〔地名・建築物一覧〕〔人名一覧〕〔巻一 主要登場人物系図〕によって、〔注釈〕がより詳しく補われると同時に、読者には円滑で精確な読解

が保証されているといえよう。

本書は、本学会会員の松浦あゆみ氏が参加されている「浜松中納言物語の会」による一九九六年以来の長きにわたる活動成果である。目下の学界を牽引する中堅・若手の研究者たちが研鑽した蓄積であり、真理追究の結晶である。本書が、今後、多数の後続を啓発するものとなることはおそらく間違いないであろう。同じく本学会会員・特任教授中西健治氏の『浜松中納言物語全注釈』（和泉書院 二〇〇五年）・『浜松中納言物語論考』（和泉書院 二〇〇六年）にくわえて、いまここに、平安後期王朝物語文学研究の新しい指針が誕生した。（私家版、二〇二二年五月二十五日、二〇六頁）

（かわさき・まち） 本学准教授